

| | |
|----------|--|
| 氏名 | アイトゥン オズベッキ Aydin ÖZBEK |
| 学位 | 博士 |
| 専門分野の名称 | 文学 |
| 学位授与番号 | 博甲第3691号 |
| 学位授与の日付 | 平成20年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当) |
| 学位論文題目 | トルコ語における機能動詞の諸相 |
| 学位論文審査委員 | 主査・教授 和田 道夫 准教授 栗林 裕 教授 宮崎 和人 准教授 片桐 真澄 |

学位論文内容の要旨

本論文は、トルコ語における述語名詞と述語動詞の結合によって形成される機能動詞結合の文法構造について日本語を中心とした先行研究に基づきながら分析したものである。本論文の目的は以下の二点に焦点をあて、解明を試みる。

1) トルコ語における機能動詞の存在とその存在理由の解明

2) 結合によって派生するボイス、アスペクト、ムード的な用法を基にした分類

本論文は全7章、A4版241頁で構成され、そのうち80頁はトルコ語についての記述的言語資料である。以下、本論で取り扱われる問題の導入と各章の内容について略述する。単語連結の中にはさまざまな形のものがあり、その中で機能動詞を含む結合は言語学の各分野において異なる呼び方をされている(例: helping verbs, support verbs, complex predicates, operator verbs, auxiliary verbs, light verbs)。英語の場合は、Jespersen (1909-49: Part VI)がこれらの動詞を「軽動詞」(Light Verb)と呼んでいる。

| | |
|------|---|
| take | a drive, a ride, a walk, a rest |
| have | a chat, a wash, a shave, a drink, a smoke |
| give | a sigh, a groan, a laugh, a shout |

Jespersen(1909-49: Part VI)

その後、軽動詞構造(Light Verb Construction)が注目され、さまざまな言語において研究されてきた。特にこの分野において決して無視することのできない先行研究として Grimshaw & Mester (1988)の日本語の「する」を中心とした軽動詞構造に関する論文がある。それ以後、日本語以外の言語においても軽動詞構造の項構造についての研究が発展したといえる。しかし、彼女達の研究には未解決の点も多く残っているため、日本語学研究者を含め多くの言語学者の間で今なお議論が続いている。機能動詞を広義で研究対象としたのはドイツ語学者の Polenz (1963)である。彼が提唱した「機能動詞」“Funktionsverb”という用語は、日本では岩崎 (1974)によって取り上げられ、日本語でも機能動詞という用語が使用されるようになった。しかし、

岩崎 (1974)では「する」以外の機能動詞については述べられていない。その後、村木 (1991)では日本語の「する」以外の機能動詞を紹介し、日本語における機能動詞の定義は、この論文をもって明確になったといえる。本論文では軽動詞と機能動詞のそれぞれの構造を個別に分析し、それらの分析に共通する問題や、その背後に隠された原理的な問題を再分析することによって機能動詞とは何かを追求する。

第1章 はじめに では、本論文の目的、トルコ語に関する一般的な説明やトルコ共和国成立後に生じた古い動名詞の排除などの現象を紹介し、機能動詞の定義をまとめる。最後に、本論文の研究手法を述べる。

第2章 日本語における機能動詞 では、本論文の出発点となった村木 (1991)が提唱する日本語における先駆的な研究とその定義について具体例をあげながらまとめる。村木 (1991)は、機能動詞を「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞」と定義している。この定義により「する」は典型的な機能動詞であるが、次のような例の述語動詞である「かける」や「とる」などの動詞も機能動詞として表される場合もあると主張している。

- 1) a. 太郎は花子をさそった。
b. 太郎は花子に さそいを かけた。
- 2) a. 山田さんは課長に連絡した。
b. 山田さんは課長に 連絡を とった。

さらに、これらの機能動詞とも異なる働きを果たす機能動詞の存在にも注目している。たとえば、日本語の受動態は通常、統語的に受動態マーカである「-られ」が動词语幹に付加されることによって形成されるのに対し、機能動詞は受動態マーカを要求せず同様な受動態の意味を表現できる場合もしばしばある。

- 3) a. NHK の番組改変疑惑を報じた「朝日新聞」もまた、その資料の社外流出や、総選挙報道における虚偽の記事などをめぐって**批判を浴びました**。
b. NHK の番組改変疑惑を報じた「朝日新聞」もまた、その資料の社外流出や、総選挙報道における虚偽の記事などをめぐって**批判されました**。

第3章 トルコ語における機能動詞 では、村木 (1991)が提案した機能動詞の様々な特徴を検討しつつ、トルコ語における軽動詞構造の特徴を考察する。特に、2種類存在する軽動詞である *et-* と *yap-* は場合によって交替できる場合とできない場合があるが、それぞれの特徴を概観した上で、*et-* と *yap-* の交替条件を明らかにする。

第4章 トルコ語の機能動詞と機能動詞のタイプ では、現在まで機能動詞として扱われてこなかった現代トルコ語における機能動詞を様々な観点から概観する。*et-* と *yap-* に比べ、比較的生産性の低いと思われるそれぞれの機能動詞は、日本語をはじめとする他の言語における機能動詞結合がもつ特徴との共通点が多く見られる。

第5章 機能動詞のヴォイス・アスペクト・ムードの用法 では、*kur-* に代表される機能動詞をトルコ語大辞典から取り出し、それぞれがもつヴォイス、アスペクト、モダリティの用法

を分類する。トルコ語における多くの機能動詞は、トルコ語大辞典において動詞そのものが登録されている項目の中で第2義あるいは第3義として説明されている。しかし、本論文は動詞の下位意義として登録されている機能動詞には本来その意味が存在しないと主張する。したがって、元来の意味を失ったと仮定される機能動詞は、実質的な意味を提供する名詞、動名詞、形容詞などが存在しない限り、辞書に登録された第2あるいは第3の意義は解釈不可能である。例えば、トルコ語大辞典において kur-「組み立てる」の第1義は çadır kur-「テントを組み立てる」のような「ある物の部品を組み合わせてまとまった物に作りあげる」であるのに対し、第12義は「想像する」である。第1義と第12義には近接性の関係があるとは考えにくく、kur-を単独で「想像する」と解釈するのも不可能である。しかし、hayal kur-「想像 kur-」というような「想像」という意味をもつ名詞と結合する場合のみ「想像する」という意味が表れるが、その場合でも kur-ではなく、「想像 kur-」という結合にその意味が含まれていると考えられる。本論冒頭の目的の2)は本章で解明が試みられる。

第6章 イディオム、メトニミーと機能動詞結合の関係 では、Püsküllüoğlu (2005)のイディオム辞典において登録されている約12000項目の中にイディオムとして登録された機能動詞構造に対し、いくつかの種類の統語的テストを基準として用いて抽出する。その言語資料の分析を通して、機能動詞構造とイディオムの定義を巡る諸問題について以下の項目の解明を試みる。

①イディオムと機能動詞構造の相違点とその識別方法の確立。

②機能動詞構造とイディオムの間に存在している中間的な構造の位置づけ

第7章 総括 では、本論文で行った研究、考察を踏まえてトルコ語における機能動詞の特徴をまとめとして述べる。本論冒頭の目的の1)は本章で解明が試みられる。

言語資料 巻末に現在に至るまで体系的な全体像が明らかにされていなかったトルコ語における機能動詞結合のデータベースを作成する。トルコ語大辞典、イディオム辞典、新聞や他のマスコミで用いられる機能動詞結合をリストにし、第1章で提案した統語的テストを行ってその結果も示す。

学位論文審査結果の要旨

学位論文審査会は、2008年2月19日、学内審査委員4名により行われた。審査結果は以下の通りである。

本論文は日本語の機能動詞結合の概念に基づき、トルコ語の機能動詞構造を中心とした実証的な研究である。トルコ語の機能動詞を一つの枠組みとして取り扱った初めての試みであるといえよう。論文の形式的な観点からみると論文中の各章は有機的に関係付けられており、冒頭で提示した問題点に対して、明確な結論を出そうとする意欲的な試みである。トルコ語における機能動詞結合がどのような存在であるかは、従来ほとんど追求されることはなく、多くのトルコ語研究者は機能動詞結合をイディオムとして扱っている。そのような状況の中で、本論文では村木(1991)に代表される日本語の機能動詞の分析を方法論として援用し、トルコ語における機能動詞の意味と機能を多角的に分析し、その全容を体系的に明らかにした。

本論文の第一の目的である、「トルコ語における機能動詞の存在とその存在理由」について「機能動詞は形態的な動詞化が不十分な場合において、名詞または動名詞をさまざまな用法で動詞化するために用いられる動詞」であると結論付けた。また客観的にトルコ語の機能動詞を規定するための統語的テストをいくつか工夫した。本論文のもう一つの大きな成果は現在に至るまでなされることがなかったトルコ語の機能動詞結合のデータベースの作成である。Püsküllüoğlu (2005)のイディオム辞典において登録されている約 12000 項目の中から本論文で考察した客観的な言語テストに適合する機能動詞をそのテストの結果とともに抽出した。これは、今後の機能動詞研究について考察する研究者にとって大変有益なものとなる。また、考察の過程で得られた様々なトルコ語の文法構造についての知見は、本論文での主題に関わるだけでなく、今後のトルコ語の文法研究に大きく寄与するものであることは疑いない。

以上のように論文に関しては積極的かつ肯定的な評価が審査委員会での共通の意見であったが、いくつかの指摘もなされた。代表的なものを以下に列挙する。イディオムと機能動詞の区別が明確になされていない。機能動詞と名詞抱合構造などの関連文法現象との関連が不明確である。意味役割の付与に関する説明が不十分である。メトニミーや文法化などいくつかの文法用語の本論中での使用方法に正確でないものが見受けられる。また機能動詞結合のイディオム化へのプロセスの解明や機能動詞あるいは機能動詞結合のその他の諸相なども残された問題点である。しかしながら、こうした問題は今後さらに研究を発展させていく際の課題であり、本論文の意義を大きく損なうものではないという審査委員の共通の認識に達した。

審査委員会は、以上により、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。